

鬼

安珍は、中辺路を一目散に、真砂の土地へと歩いている。懐の中には、増皇にもらったナギ人形が、大事にしまわれている。

今後、増皇との関係は、自分達・・・奥州の者にとって、勢力拡大のための大きな礎になるだろう。

あれから・・・とんとん拍子に、交渉がすすんだ・・・。

増皇は、来年度の貴族の行幸のための法具一式の注文を安珍に斡旋してくれた・・・。その打ち合わせのために、数日を要した・・・。

心は、とつくに真砂の地へと向かっていたのに・・・それから、さらに・・・降り続いた雨のせいで、ずいぶん、御山の滞在日数が伸びてしまったものだ・・・。

清姫に愛していると告げよう・・・。

そして、清重殿の許可をもらって、清姫を奥州まで連れていこう・・・。

それは、どんなに楽しい旅になることだろう・・・。

父や母は、どんなにびつくりするだろう・・・。

安珍の頭の中で・・・どンドン、空想が広がって行く・・・。

そして、その空想が、安珍の足を速めて行く。

もう、あと一時も歩けば・・・滝尻につく・・・。

まだ、昼だ。・・・日も上らないうちから歩き出して・・・休みもとらず、歩き続けてしまった・・・。

なんて、せっかちなんだ・・・俺は！

安珍は、自分で自分の行動を笑った。

・・・今の時間・・・いつもなら、清姫は・・・川で、水浴びをしている頃だ・・・。もし、そんなところで・・・そんな状態で・・・顔を合わせたなら、それこそ・・・どんな顔をしてよいかわからない。

気温も、ずいぶん、上がってきている。少し、休もう・・・と安珍は思った。

そばに大きなムクの樹があった。根元に大きな石があり、ちょうどよい塩梅に日影になっている。

安珍は、その大きな石の上にゴロンと横になった・・・。自分では、気が付かなかつたけれど・・・やはり、ずいぶん、疲れていたらしい・・・。

すぐに睡魔が襲ってきた・・・。